

Editor's Note

講評

今年度は、卒業論文を提出する資格をもつ研究室所属の学生数は3名でしたが、残念ながら2名のみの提出となりました。

塩島由依さんは、大学生を対象に未来・将来に対する考え方の一つとして希望（hope）を取り上げて検討しました。調査1では、自己肯定感が希望に正の影響を与えるという仮説に基づき、職業意識との関連で調査研究を行いました。また調査2では、ホープ特性が高いほど未来に対するイメージが肯定的であると予測して、SD法で未来に対するイメージを測定しています。その結果、ホープ尺度得点が高いほど未来の印象得点が高い傾向を見出しています。調査3では、Adolescent Life Goal Profile Scale（ALGPS）を本邦ではじめて邦訳して、人生目標に対する意識とホープ特性の関係を検討しています。その結果、世代性目標については、達成可能である認識を持ち、努力をすることがホープ特性を高める可能性が示されています。我が国ではネガティブな心理過程に関する研究が幅を効かせている中、塩島さんは3年生から一貫して希望というポジティブな心性に焦点を当てて研究し続けた点は高く評価されます。

田代美冬さんは、いわゆるディレクター課題を用いて、

他者視点を理解し意図を読み取るというマインドリーディングの活性化に対して、私的発話が及ぼす影響を検討しました。私的発話傾向が高いとマインドリーディング能力が活性化し、より少ない認知コストで正確に素早く他者の意図理解が可能になることから、ディレクター課題における反応時間が短くなるという仮説に基づき実験的な検討を行っています。大学生29名を対象にした実験1では、ディレクター課題の難度が高いほど反応時間（オブジェクトを動かすまでの時間）が長くなることを見出しています。しかし発話傾向尺度を用いて、発話傾向高群と低群との間では反応時間に差を認めることができませんでした。引き続き実験2では、幼児49名を対象に、大学生と同様のディレクター課題を行わせ、反応時間と視線到達時間を測定し、私的発話の影響を検討しています。課題の難易度による反応時間に有意差が認められ、選択肢となるオブジェクトが多くなると視線到達時間は長いことを見出しています。しかし発話の効果は見出すことはできませんでした。私的発話とディレクター課題との関連性を見るという新しい研究観点、および幼児に対する同課題遂行時に注視点を測定して分析したという点で、独創的な試みとなったことが高く評価されます。

本年度は、プレ卒論文としては次の3本が提出されました。

緒方さんは、痛みの異時点間選択課題を用いて、痛みに関する3つのパラメータ（遅延コスト、遅延価値割引、意思決定の逆温度）と痛みに対する心配に関するメタ認知的信念との関連を検討しています。心配に対するメタ認知の能力が痛みに対する将来予測に影響を及ぼすという仮説に基づき実験的検討を行い、効用割引理論に基づく先行研究と同様の結果を得て、痛みに対する負の時間選好を確認しています。しかし、仮説とは異なり、心配に関するメタ認知の高さにかかわらず“遅延する痛みより今日の痛みを選択する傾向”があることを見出しています。このテーマに関する研究時間が必ずしも十分でなかった点が惜しまれますが、今後の発展が期待されることです。

高津さんは、慰め行動について、特に慰めの受け手が抱く感情に焦点を当てて大学生を対象に調査研究を行いました。独立変数は、親密度（高い順から「親友」、「友人」、「顔見知り」）および慰め方（「共感」、「アドバイス」、「何もせず離れる」）で、それらによって慰めの受け手がどのような感情を抱くかを検討しています。その結果、肯定的感情と安静状態においては、「何もせず離れる」場合は感情得点が低くなること、一方、否定的感情においては、「何もせず離れる」ことが最も感情得点が高いことなどを見出しています。このような心理過程をピネットによって場面を想定させて回答させる研究には、種々の困難さがありますが、多くの変数の有意性を見出している点が注目されます。

生島さんは、大学生のもつ死生観と人生目標との関連性を検討しました。死生観尺度、およびAdolescent Life Goal Profile Scale（ALGPS）を翻訳した尺度を用いて調査研究を実施しています。その結果、ALGPSの達成可能性において、「世代性」と「成果」に有意な得点差、死生観尺度の分析では、大学生は死に対して考えることを避けて考えることが多い傾向を見出しています。また、死生観と人生目標の関連を検討するため重回帰分析を行って、死について考えることを避けている場合、成果目標の重要性の認識を低下させる傾向を見出し、死への恐怖・不安が成果目標の重要性の認識を高めることを示唆する一方、死後の世界の存在の認識が、成果目標の達成可能性を低下させることも示されています。青年期における死生観の研究もロバストな結果を得ることがきわめて難しいテーマですが、尺度の選択などに時間をかけた結果、想定を上回る成果につながったと評価されます。今後の展開が期待されます。